

# まえがき

中国教育部と中国中医薬管理局は中医教育推進のため、基礎諸科目の講義（各科目は約 50 分の講義で計 80 回前後から成る）の映像教材を作成した。各教科には中国全土からその道の第一人者が選ばれ、『傷寒論』は北京中医薬大学の郝万山教授が担当された。

映像教材が完成して数年後、映像教材をもとに、講義者自身の加筆訂正などを経て、『講稿』シリーズと命名されて人民衛生出版社から発刊された。

この度出版される本書は、上記の『郝万山傷寒論講稿』（人民衛生出版社、2008 年）をもとに、日本の読者向けに大幅に加筆したものだ。収録の条文には、すべて訓読と現代語訳を付けた（多くは『現代語訳・宋本傷寒論』（東洋学術出版社、2000 年）から引用したが、解釈が異なる場合は、これを反映させた）。また、郝先生講義の上記映像資料からも、参考資料として多くを引用した（本文中では「ビデオ教材より」と明記）。その他にも、興味ある資料を多く追加した。

## 本書の特徴：

1. そもそも『傷寒論』は、『傷寒雑病論』として張仲景によって著されたが、その伝承の過程で『傷寒論』へと、その名前と内容とを変化させた。『傷寒論』中になぜ「雑病」の内容も含まれているのか、その理由を詳述している。
2. 全 56 条から成る「厥陰病篇」には、もともと条文はわずか 4 条しかなかった。残りの 52 条文は、その後続く「厥利嘔噦篇」の条文である。現行の『傷寒論』では、この「厥利嘔噦篇」の篇名が脱落し、元来ここにあった条文は前の「厥陰病篇」に移行・編入された。このことが、厥陰病を理解困難にしている一因だと指摘している。
3. 王叔和が張仲景の「直弟子」である説が紹介されている。
4. 成無己が注釈した「項背強ること凡<sup>こわば</sup>凡<sup>しゅうしゅう</sup>」の誤りを指摘・修正している。
5. 「蒸蒸と発熱」、「翕翕と発熱」、「淅淅と悪寒」など、『傷寒論』中に頻用される「連綿詞」は「音」だけを使用しており、字義とは関係ないことを説明している。

6. 「満」の字について、「腹満」はそのままではよいが、「胸満」は「胸悶」と読み換える必要があることを指摘している。
7. 仲景は『傷寒論』の中で、「中風」と「傷寒」をそれほど厳密に区別して使用しているわけではない。同様に本書において郝先生も、「風邪」「寒邪」「風寒の邪」の区別もそれほど厳密ではない。
8. 当時、白虎加人参湯に配合された人参は、現在の人参とは別物であった。50年前に絶滅した山西省上党地区に産した「上党人参」が、当時の人参に近いと考えられる、とのこと。
9. 「煩躁」と「躁煩」とは、病機・症状が異なることを説明している。
10. 少陽病の「往来寒熱」の病機について「分争」の点から説明している。これに関しては、郝先生の師である劉渡舟教授の見解を継承しているが、別の解釈に至っている。また、少陽病に現れる発熱は、「経証」で出現する往来寒熱だけでなく、「腑証」の場合は持続的な発熱が現れることを説明している。さらに「少陽腑実証」の概念を提起している。
11. 『傷寒論』の傷寒は6日、中風は7日で治癒するという記載にもとづき、これを発展させ、動物の体内時計の問題に言及している。
12. 従来は「太陽と少陽の合病」とみなされている柴胡桂枝湯証に対し、郝先生は「太陽・少陽・太陰の同病」との自説を紹介している。
13. 太陽病に消化器症状が伴う場合の病機、「太陽と陽明の合病で下利する」場合の病機について、明解な説明がある。

以上、本書に述べられた、従来の『傷寒論』解説書には見られない話題のいくつかを列挙した。『傷寒論』学習者にとって、興味津々の見解を満載した本書は、きっと読者の知的好奇心を満たすものと確信する。

生島 忍